

依田安昌さん

1924(大正13)年9月生まれ

当時の本籍地 長野県

陸軍 衛生兵

独立混成第1旅団独立歩兵第74大隊



中国・山東省、モンゴル

●1940(昭和15)年 北京気象庁に軍属として就職

6名1チームで、予報図を1時間ごとに書く。3チームがあり交代制だった。あるとき観測所からの連絡がすべて暗号に切り替わった。何かあるぞと思っていたら20日後太平洋戦争が開戦した。

●1944(昭和19)年12月25日 現役入営、独立混成第1旅団独立歩兵第74大隊に衛生兵になるように言われ北京の陸軍病院で研修を受ける。

●1945(昭和20)年6月16日夕方より戦闘開始

汪兆銘軍200名が八路軍についたとの情報が入り、がっかりした空気が流れた。

400名ほどで城壁内に閉じこもりその周囲を数千人に囲まれることになった。城壁があるのでかえって逃げ出せない。夜中に土堀に抜けられる穴を作りそこから出ていくが、時間がかかるのですぐに見つかってしまう。出て行った先でまた囲まれるということを繰り返した。

18日の朝までにはばらばらになり指揮系統もなくなった。36名が残ったところで、生き残ることは難しいという判断で自決することになった。そのことを知らせる伝令としてまだ元気の残っていた5名が選ばれ(5名の誰かが生き残るだろう)他の人間が道を開き5名が脱出することになった。

脱出は出来たものの平原で逃げ場がない。結局また3~400人に囲まれることになり2名は腹部を撃たれ戦死した。3名でお墓の土まんじゅうに逃げ込んだ。3名で手りゅう弾と銃が一つずつだけ。

死のうと言いが合うが3名の呼吸が合わない。「水を飲まないで死ねない」と一人が言い出し小便を飲む。濃縮され渋くてあたたかった。そうしているうちに捕まってしまった。

中国軍の中隊長は日大卒で流暢な日本語を話した。丁寧な扱いだったが、銃を持っていた1人は他所へ連れて行かれその後は分からない。皆死にましたよと言われたが、戦後調べると日本軍の援軍があり、八路軍が引き揚げて36名の半分ぐらいは復員したようだ。

吉田やすおと偽名を名乗った。敗戦前の捕虜なので、以前古参兵からその時は偽名を言えと教えられていた。国を通じて捕虜の名前は伝わるだろうから、それが故郷に行ったら迷惑がかかると思った。

●1945(昭和20)年8月15日 敗戦、中国兵から「日本は負けましたよ」と伝えられた

●1945(昭和20)年9月1日~ モンゴルで抑留

ソ連へ抑留されるということで1日15里ずつ歩いて移動したが、受け入れ先がいつぱいだという説明でトラックでモンゴルに戻された。モンゴルでは収容所に入る訳ではなく、農村の普通の民家に分散して収容され、その家の仕事を手伝った。「唯物史観の勉強をするか」と誘われてそうすることにしたが、学習をした者、していない者で収容の形態は変わらなかった。

●1946(昭和21)年6月 復員船で

船は夕方出港し、朝博多に着く予定だった。

「今夜共産主義の学習組の中から7人の人間を袋叩きにしようという噂がある。7番目に名前があがっているから気をつけろ」と親しい友人が教えてくれた。夜になると実際にその順番で呼び出しが始まった。数十分ごとにグループの配下の者が呼び出しに来る。実際に7番目に呼ばれた。

呼ばれたときちょうど「投げろ」という声がかかって6番目の人間が海に放られるのを見た。自分も殴られ「投げろ」と声がかかったがリーダーの側近で「こいつは衛生兵で世話になった者も多いから勘弁してやれ」と言う者がおり、リーダーもあっさり「そうか、それならやめよう」と言って戻ることができた。

戻ると心配していた学習組の仲間たちが「あとの6人は戻っていない。よかったな～」と喜んでくれた。

やったのもやられたのも全員敗戦前に中国の捕虜になっていた45人ほどのメンバー。殺されたメンバーは中国語が得意な者が多く、学習組の中で中国側に交渉の窓口として選ばれていた。実際には待遇改善に尽力していたが学習に参加しなかったグループにはねたまれていたのだと思う。

とにかく怖かったので船が着いたら復員手続きはせずすぐ列車に乗って帰郷した。(収録日:2010年8月29日)